

「師走に思い出して欲しいこと」ヨハネの黙示録 2:1-7（新共同訳）

I 導入部

- みなさん、おはようございます。初めに、お祈りをします。
- 先週の日曜日は、この青葉台教会の 50 周年記念礼拝でした。本当に、素晴らしい礼拝と、午後の愛餐会をもつことができたことを、心より感謝しています。
- そのような記念すべきときに、私も青葉台教会にいたることができたことを、神さまに本当に感謝していますし、そのためにたくさんの素晴らしい働きをしてくださったお一人おひとりにも、心から感謝をしたいと思っています。
- よく言われるのは、大きなイベントの後というのは、注意すべきだということです。なぜかと言えば、大きなイベントの前は忙しいんですね。しかも、ずっと緊張の糸が張り詰めているということもある。で、イベントが終わって、安心することで、一気に疲れが出たり、最悪の場合燃え尽きるということだってある。
- しかし、幸いというか、何というか、青葉台教会は、これからがさらに忙しくなると聞いています。私にとっては、初めてこの青葉台教会で過ごす 12 月ですが、クリスマスです。教会が最も忙しいシーズンであり、「やばいぞ」と何人もの方に言われているんですね（笑）安心している暇も、燃え尽きている暇もないのかもしれないかもしれません。
- 12 月は古いカレンダーでは、「師走」と呼ばれています。「師」、つまり先生が走る。これは、仏教のお坊さんや、神道の神主が、この時期初詣などいろんな対応のために走り回っていたことが由来であるとも言われますが、牧師も一応「師」のつく職業ですから、この時期は本当に忙しいです。
- あるいは、この「師走」というのは、「師」という、普段は落ち着いて、静かな人でも忙しくなるんだという由来だという説もあるそうです。普段は落ち着いていても、何かそわそわし始める。そのような忙しい季節がやってくる。その前に、師走にあなたに思い出していただきたいことをお伝えしたい。神さまがあなたに覚えていて欲しい、思い出して欲しいことがある。そのことを、本日開かれました黙示録 2:1-7 を通して、ご一緒に受け取っていきたいと思うのです。

II 本論部

1 ほめてくれるイエスさま

- それでは、早速 1 節をご覧ください。「**エフェソにある教会の天使にこう書き送れ。『右の手に七つの星を持つ方、七つの金の燭台の間を歩く方が、次のように言われる。』**
- ヨハネの黙示録という書物は、黙示文学という一つの形式で書かれており、ヨハネが見た、よく分からない幻がたくさん描かれています。一見すると、何のことを言っているのか分からない、注意深く文脈や聖書全体の用語を見ないとよく分からないことも多い。今日のこの箇所については、文脈を見ていくときに、どうやらここで話しているのはイエス・キリストだということが分かる。
- イエスさまはこう言われたと言うのです。2 節、「**わたしは、あなたの行いと労苦と忍耐を知っている。あなたの行いと、労苦と、忍耐を、わたしは知っている。**
- エフェソという町は非常に豊かな街であったと言われますが、靈的には非常に暗い街であったと言われます。性的な罪や、金銭的な誘惑、軍事力に頼り、自らを神とする皇帝を拝む人々に取り囲まれ、そのなかで、クリスチャンは圧倒的少数派であった。
- でも、そのなかで、エペソの教会のクリスチャンたちは、たとえ人数は少なくとも、誠実に教会を支え、奉仕をし、またイエスさまの愛を伝えようとしていた。苦労があったことでしょうか。忍耐をしなければいけないことだってあった。でも、それでも、一生懸命、神さまを愛し、また人々を愛そうとしていた。
- また、このようにもあります。2 節つづきから。「**また、あなたが悪者どもに我慢できず、自ら使徒**

と称して実はそうでない者どもを調べ、彼らのうそを見抜いたことも知っている。」

- 6 節には「ニコライ派」という記述もありましたが、これが具体的にどんな人たちを指しているかは議論があります。いずれにせよ、「異端」と言われる、キリスト教と名乗ってはいるものの、全然違う教えを語っていたグループが、当時からあったわけです。エフェソのクリスチャンたちはそれを見抜いた。つまり、正しい教えをきちんと理解していた。
- その意味では、一生懸命、聖書のことをきちんと学んでいたのでしょう。イエスさまは言われるのです。あなたの素晴らしい奉仕、また素晴らしい姿勢、知識、苦勞。それをよく知っている。あなたたちは本当によくやっている。
- イエスさまは、きつとこの青葉台教会にも同じことを言われると思うのです。本当にこの教会のみなさんは、教会における奉仕はもちろんのこと、教会の外での奉仕、つまりそれぞれのお仕事や、勉強や、家事・子育て、地域での働き、そしてそれらを覆う「祈り」という最も大切な働きに本当によく励んでくださっていると、いつも感動させられています。
- イエスさまはこの教会の一人ひとりに「本当によくやっているね」と言ってくくださっている。あなたの行いと苦勞と忍耐をわたしは知っているんだ。イエスさまは私たちの働きを喜び、ほめてくださるのです。
- 3 節。「あなたはよく忍耐して、わたしの名のために我慢し、疲れ果てることがなかった。」当然肉体的に疲れることはあったと思います。でも、今のところは、エフェソの教会のクリスチャンは、疲れ「果てる」ことはなく、よくやってくれていた。
- 「わたしの名のために」、イエスさまのために、と思っ、本当によく励んでいた。本当にそれは素晴らしいことだと、イエスさまはほめてくださる。
- そのような慰めに満ちたメッセージが、ここにあるわけです。その意味では、私たちも、イエスさまがしてくださったように、お互いに感謝しあい、よくねぎらう教会でありたいと願っています。

2 初めの愛から離れている

- もしも、ここで終われば、わりと快適なメッセージなのですが、このメッセージには続きがあるので。イエスさまは「しかし」と語る。「しかし」と語るのです。
- あなたはよくやっている。でも、「あなたに言うべきことがある。」非難すべきこともある。あなたには問題もある。それは、「あなたは初めのころの愛から離れてしまった」。イエスさまと初めて出会ったころの、初めに持っていた愛から離れてしまった。そのようにイエスさまは語るんですね。
- この夏、私が普段奉仕しております、KGK キリスト者学生会の夏のキャンプで、ひとりの学生が、イエスさまを信じて、クリスチャンになる決心をしました。彼女は、留学先で初めて教会に行っ、イエスさまのことを聞いて、良いなあと思ったのですが、なかなか信じられなかった。
- でも、この夏、イエスさまを信じることができた。彼女は泣いてました。彼女は本当に嬉しかったようで、すぐに妹さんを教会に誘ったそうです。最高のものだから、愛する妹さんにも味わって欲しいと思った。
- で、その妹さんは、「私はこういうの信じないから」と言いながら、礼拝にきてくれたそうです。そしたらなんと、賛美を歌っているときに、泣いていたそうです。
- 彼女はお母さんにも言っみた。反対されるかもしれないと恐れていたそうです。でも、お母さんは「宗教は自由だから良いんじゃない？私も今度行っみようかな」と言っくれたそうで、本当に喜んでいました。
- 私は彼女の姿を見ながら思っんです。私は、この人ほどイエスさまを愛しているだろうか？
- もちろん、私はイエスさまを信じています。でも、イエスさまを愛しているかと問われたら、自分は彼女の足元にも及ばない。そのように思わされたのです。
- 彼女の姿を見て、自分が大学一年生のとき、本当にイエスさまの愛に感動した、自分がイエスさまに出会った頃のことを思い出しました。今から思うと、本当に未熟だった。でも単純に、シンプルに感動して、イエスさまを愛していきたくと思わされた、あの頃のイエスさまへの愛と思い出した。

- あなたにとっては、「初めのころの愛」とはどのようなものでしょうか。思い出してください。初めてこの愛について耳にしたとき。洗礼を受ける決心をしたとき。洗礼を実際に受けたとき。あるいは、洗礼を受けて、ずっと経ってからの、あの礼拝、あのキャンプ。
- 私が本当に感謝しているのは、神さまは、私に、そのようにイエスさまの愛に感動する経験を何度も与えてくださった。でも、気がつくとその愛から離れてしまっていることがあまりにも多い。
- エペソ教会がそうであったように、私たちは、すごい働きをしながら、初めの愛から離れてしまっていることがあるのです。これは誰でもある。なぜなら、人間は変わりやすい存在だからです。愛していると思っていたのに、その愛が覚めてしまう。期待しなくなり、物足りなくなってしまうことがあまりにも多い。
- かく言う私も本当にそれが多いいですね。教会や KGC での働きも、聖書を学ぶことも、大切なことです。それをイエスさまは本当に喜んでくださっているということはよく分かっている。そしてそれによって、結果は出るかもしれない。実が結ばれるかもしれない。
- でも、そのなかで、特に「忙しさ」のなかで、「師走」になると、イエスさまに愛されているということを忘れてしまう。その愛ゆえにこれを行っているのだということを、いとも簡単に忘れてしまう。イエスさまへの愛を失ってしまう。「初めのころの愛」から離れてしまう。それが本当に多いいですね。

3 初めの行いへ

- しかし、グッドニュースがある。ここに福音が、喜びの知らせがある。イエスさまは、初めの愛から離れてしまったエペソ教会をそのままにしておかれないのです。放っておかない。
- なぜか。それでも愛しているからです。だからこそ、彼らを招く。私たちが招かれる。
- 5 節をご覧ください。「だから、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて初めのころの行いに立ち戻れ。」
- 実は、私にとっては、毎週の礼拝は「初めのころの愛」に帰ることができる場所です。もちろん礼拝というは受けるだけでなく、献げるものですね。しかし、本当に礼拝をささげるなかで、またみなさんとの交わりのなかで、賛美を歌うなかで、あるいはメッセージを聴くなかで、再び、「初めのころの愛」に帰ることができる。いつもではないです。でも、礼拝はそれが起こる場所なんです。
- 最近特に、ちょっと歳を取ってきて涙もろくなって、賛美を歌いながら泣いてしまうときもあります。先週も「いとも尊き」という賛美を歌いながら、泣いてしまって、本当に感動しました。
- 私たちは、この場所で、自分は愛され、赦されているという安心のもとに、「どこから落ちたかを思い出し」することができる。自分を責めるためではない。赦されるのだと安心しながら、自分の失敗を、罪を見つめ、「悔い改め」ることができる。
- ここで言う「初めの行い」とは、何かがんばって、無理やりすると言うものではない。ここで、イエスさまの大きな愛を知ること、恐れるから解放されて、イエスさまを愛するゆえに、何かを捧げる者に変えられる。「初めのころの愛」によって生きる者へと変えられていく。

4 光り輝く教会

- 5 節の続きにはこのようにあります。「もし悔い改めなければ、わたしはあなたのところへ行って、あなたの燭台をその場所から取りのけてしまおう。」
- 燭台というのはロウソクです。もし、この愛を忘れてしまうのならば、教会は光を失ってしまうのです。でも逆に言うならば、もしイエスさまの愛を、何度忘れそうになってもあきらめることなく思い起こし続けるならば、もしその愛によって本当に愛し合う教会となっていくならば、教会は光輝くのです。
- 先週の 50 周年記念礼拝と愛餐会で、改めて、本当にこの青葉台教会は良い教会だなあと思いました。壮年を中心にユニークな方々がおられ、また本当に素晴らしい信仰者がたくさんいる。もちろんこの教会に問題が一つもないと言っているのではありません。問題がない教会は絶対にありません。

なぜなら、問題のない人間が一人もいないからです。

- でも、私が本当にこの教会が本当に素晴らしいと思うのは、この教会が、イエスさまの愛によって輝いている教会だからです。問題があっても、それでも、イエスさまの愛を思い出し続け、その愛に戻り続ける教会、自分たちの努力ではなく、イエスさまの愛によって、この暗い世界のなかで光り輝く教会であり続けたいと思うのです。
- 最後に、7 節。「耳ある者は、“霊”が諸教会に告げることを聞くがよい。勝利を得る者には、神の楽園にある命の木の実を食べさせよう。」
- 聖霊は、あなたに語られています。教会に語られているのです。「初めのころの愛」に戻ってほしい。もちろん聖霊の招きを無視することはできます。でも、それを本当に聴き、イエスさまの愛を見つめるとき、私たちの生き方は変えられるのです。
- そしてそのような幸いな生涯は、永遠に続いていく。もう間もなく、師走です。クリスマスです。2018 年も終わりを迎えます。私が最初に青葉台教会で説教をさせていただいたのが 1 月 21 日だったので、早いなあと思いますが、そうやって年月を重ねるなかで、私たちの人生もやがて終わりを迎えます。この地上での別れがやってくる。
- しかし、「勝利を得る者には、神の楽園にある命の木の実を食べさせ」くださる。イエスさまは 2000 年前に、この世界に来られ、十字架にかかり、よみがえれ、天に昇られました。しかし、やがて、もう一度来られる。その時に、イエスさまの十字架によって罪赦され、洗礼によってイエスさまと一つにされた私たちは、イエスさまがそうであったようによみがえる。そして、新しい天、新しい地で、永遠に生きる。永遠の愛が、私たちを待っている。だからこそ、私たちは終わりまで、主と共に歩みたい。主に仕え、主の愛のなかを歩んでいきたいのです。
- 「師走」がやってきます。いや、その前から、忙しい日々を送っておられるかもしれない。物理的に忙しくなかったとしても、心は騒いでいるかもしれない。
- 忙しさのなかで、師走に、思い出していただきたい。この愛を、「初めのころの愛」を知ること、思い出し続けることに、あなたは招かれている。今日も、招かれている。イエスさまはあなたを喜んで迎えてくださるのです。この招きに、あなたはどうか応えるでしょうか。お祈りしましょう。